ひし也、○註略我國にしてアハといふものは、彼國にしても古の時は粟と云ひけり、漢代より後に至りて、始て其實大きくして毛長きものを粱といひ、今の俗にカホアハといふもの是也實細にして毛短きものを粟といひしに、今の俗にコアハといふもの是也後には又皆通じて粟といふ事、我國の如くにぞなりける、此事詳に李東壁が本草に見えし也、さらば倭名鈔に、粟の字讀てアハといふ事はあしからず、是等の委曲を註するに及ばずして、唐韻の註を引き用ひしは然るべからず、後深草院寶治元年十一月、西國の米穀を宋國に渡す事を停止の事、宣下せられしを、權大納言藤顯朝卿の頭辨にてありし時に、粟米と書下されしを、權中納言藤定嗣卿、これも其時に參議にて、アハノミとは何ぞと云ひて嘲けられし事によりて、たがひの爭ひになりし事の如きも、古より其訓義の詳ならぬが致せし所なるなり、又秫を呼びてキビノモチといひ、粱を呼びてアハノウルシネといふが如きも、如何あるべき、黍といふは卽稷の粘する物、今俗にモチキビといひ、秫といふは、卽粱と粟との粘する物、今俗にモチアハといふ物也、詳なる事は、李東壁本草に見えたり、

〔倭訓栞前編二〕あは　粟をいふ、淡しき義なるべし、字も訓も米のもみの時をいふ、後一種に名く、又禾をよめり、禾は稻黍稷の通名なれども、稷を五穀の長といへるによれる成べし、○略中和名抄に粱米をあはのうるしねとよめり、されど大あはなり、又猿あはといふはうる粟、もちは秫也、霜の後に苅を霜粟といふ、

〔古事記傳五〕粟は書紀神代卷にも粟田（アハフ）と云、神武卷の大御歌にも阿波布をよみ賜ひて、萬葉三卷春日にも、和名抄に、唐韻云、粟禾子也、和名阿之野邊之種益乎、粟古に殊に多く作し物なり、故粟のよく出來る國なる故の名なるべし、波とあるは、粟（ソク）字につきたる義なり、漢國にては、たなつ物を凡て粟（ソク）と云こともある故なり、されど皇國にて粟と云は、一種の名にて、總てにはわたらぬを、禾子也と云注を引ながら、和名阿波とせしは、順の誤なり、古語拾遺に、求肥饒地遣阿波國云々、こは穀麻を殖むためなれど、肥地ならば粟もよくみのるべし、伯耆風土記に、相見郡郡家之西北有粟島、少日子命蒔粟、秀實離々云々、故云粟島也、これも粟の、島の名となれる思合べし、